

冬は寒い。

ただでさえ外出はしたくない出不精でぶしよな俺だが、輪をかけて外出する気が失せる。この地域は雪が滅多に降らないが、それでも寒い事には変わりはない。ファッションに興味もないので、冬服を楽しんだりしないし、食にそこまで執着もないので、冬の味覚にも特に惹ひかれない。

つまり、俺にとって冬など——百害あって一利なし。

一刻も早く春になってほしい。

いつそ四季がなくなつて常春になればいいとすら思う。

……………。

いや、一つだけ良い事もあった。

それは——少女達の晴れ着姿が見られる事だ。

5 戦目

『修羅場の Happy New Year』

俺の名前は、たちばな橘アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

高校生なので一月一日は当然、冬休みである。受験生に盆も正月もないらしいが、生憎と俺は受験生ではないので、大手を振って短い休みを満喫して家に引きこもっている。

除夜の鐘を神社の境内で聞き、そのまま初詣はつもうでに挑む——これを二年参りというらしい——もさ猛者達もいるようだが、何が悲しゅうて極寒の中を人混みに揉もまれたいのか、理解に苦しむ。

どんな性癖だ。変態か？

俺を含め、我が家の住人達は寒が多いので、当然、そんな無謀な事はしない。リビングでは特に誰も観ていない紅白がテレビから流れ——BGMみたいなものなので何でもいいのだ——一応、蕎麦そばだけは食べたが、深夜の二時頃には全員が就寝するという、極めて普段通りの年越しとなった。

「——ん？」

正午前、珍しく早起き——俺にとっては——してリビングに向かう道すがら、家の呼び鈴インターホンが鳴った。ちょうど玄関の前だったので、来客のために鍵かぎを開けると、見知った少女だった。

「あ、お兄さん。あけましておめでどうございます」

「あけおめ。どうした、こんな朝っぱらから？」

「もうすぐ十二時ですよ？」

「俺には早いんだよ」

苦笑を浮かべる少女に、俺は欠伸あくびを噛み殺しながら答えた。

この礼儀正しい口調の少女は高千穂ツバキ。たからほ信じられない事に、まだ小学五年生である。俺が同じ年だった頃に、こんな大人びた同級生は男女問わずいなかったと思う。

「しかし……ツバキは本当に和服が似合うな」

そう。今日のツバキは晴れ着だった。赤い生地つばきに、彼女と同じ名前の椿の花柄があしらわれている。

この年齢で和服を着ると、いわゆる『七五三』みたいな微笑ましい感じになるものだが、ツバキは和服本来の情緒というか、そこはかとなない色気を醸かもし出す。サイドポニーにした黒髪と、大人びた雰囲気のためもあるのだろう。

「ありがとうございます。和服は好きなので、そう言ってもらえると嬉しいです」

普段通りの澄ました笑みなのが、頬ほおにわずかな赤みが差している。晴れ着姿を褒められるというのは、ツバキにとっては特別な事なのかもしれない。

「午後からは家に私だけだと話したら、カナコさんが呼んでくれたんです」

先に訊ねた来訪の理由を告げるツバキ。俺の妹のカナコはツバキを溺愛しており、何かと彼女を気遣っている。俺と同じで、基本的に他人に無関心なのだが、ツバキは特別らしい。

「——あら。兄さんが応対してくれていたんですね」

背後のリビングに通じる扉が開き、件のカナコが現れた。俺より二つ年下の妹で、俺に対しては敬語で接してくる。正月という事で、黒を基調に白のアクセントというシックな晴れ着姿である。

「あけましておめでとうございます、カナコさん」

「ええ。今年もよろしくね、ツバキ。その晴れ着、とても似合ってるわ」

「ありがとうございます。お兄さんにも褒めていただきました」

「そう……それは少し残念だわ」

「はい。」

「ツバキの晴れ着姿を最初に褒めてあげたかったのに、初めては兄さんに奪われてしまったのね……」

心底、残念そうに溜息を吐くカナコ。

妹よ、多分に誤解を招きそうな表現はやめろ。

「——おい！ 今のはどういう意味だ!？」

背後から聞こえた動揺を隠そうとして出来ていない声に、嫌な予感を覚えて振り向くと、予想通りの少女が予想通りの表情で立っていた。長い黒髪をポニーテールにした少女だ。黒を基調に赤のアクセントという、やや退廃的な雰囲気を感じさせる晴れ着に身を包んでいる。ツバキやカナコもそうだが、やはり黒髪は和服に合う。

流遠ヤミヒメ。

我が家の同居人で親戚、俺にとっては同級生にしてクラスメイトでもある。

「……どこから聞いてた？」

「カナコが、ツバキの初めてはどうとか言っていたところだ！ まさかアサト、ツバキに不埒な事を……!」

動揺なのか怒りなのか、ヤミヒメはわなわなと身体を震わせ、表情はやや青ざめている。非常にめんどくさい状況だ。

ヤミヒメもまた、カナコと同様にツバキを猫可愛がりしている。それでいて、ここ数年、

ヤミヒメとカナコは折り合いが悪い事もあり、ツバキの折り合いに発展する事もある。傍

から見ている分には対岸の火事だが、その矛先が俺に向くのは勘弁してほしい。

「今のはカナコが——」

「あら。不埒な事って、ヤミヒメは何を想像したのかしら？」

釈明しようとしていた俺の言葉を遮り、カナコがヤミヒメに向けて言った。

「そ、それは……」

「ねえ、教えてちょうだい？ ヤミヒメ先輩は、ツバキが兄さんからどんな事をされる想像をしたのか」

殊更、『先輩』という単語を強調したのは、『さぞかし大人な想像なんですよ？』と煽るためだろう。この手の話題に奥手なヤミヒメは、頬を染め、しどろもどろになってしまっている。

我が妹ながら、やり方がえげつない。

舌戦でタオエンと互角に渡りえるカナコに、我が家でもっとも策略という言葉から縁遠いヤミヒメが勝てるはずがないのだ。

「どうしたの？ あなたが想像した事を、口にするだけでいいのよ？ もしかして、口にするのも憚られるような、いやらしい内容なの？ とんだ淫乱な雌犬ね」

「私は犬ではない！ 取り消せ！」

「嫌よ。淫乱な泥棒猫は、雌犬で充分だわ」

「泥棒猫は貴様だろう!!」

睨み合い、そのまま肉体言語に発展しそうな雰囲気の二人。互いに和服なので、『極道の妻たち』を彷彿とさせる——観た事はないが。

「とりあえず、上がってくれ」

「あ、はい……」

背後のカナコとヤミヒメの言い合いを尻目に、俺は未だに草履を履いたままのツバキに水を向けた。寒い玄関でこれ以上、立ち話はしたくない。

「あっ」

草履を脱ぎ、段差に足をかけようとした瞬間——ツバキがつんのめった。和服が好きといても、着る機会はそう多くはないはずだ。ならば、普段と勝手が違うのを忘れてしまうのも無理はない。実際、ベアトリーチェは慣れない晴れ着で、今日だけで何度も転びそうになったり、袖を引っかけたりしている。

「おっと」

「あ……」

咄嗟に屈んでツバキを抱きとめる。大人びているとはいえ、身長は普通の小学五年生だ。

小さく、俺でも簡単に支えられるくらい軽い。

もつとも、密着する事で、小学生離れた部位も意識してしまう結果になったが……。そう。着痩せする体質のため普段は意識しないが、ツバキは胸が大きい。『小学生にしては』とかいうレベルではなく、我が家で最大のサイズを誇るヤミヒメと同じくらいだ。まあ、どちらも正確な数値は知らないのでイメージだが。

いわゆるロリ巨乳である。

「あ、ありがとうございます、お兄さん……」

「いや、別に……」

恐らく、ツバキは胸が当たっている事に気付いている。単純に俺と密着してしまっている事以上に、それが気恥しいのだろう。彼女にとってはコンプレックスなのだから。

俺は俺で、そんなツバキの羞恥混じりの表情に、どこか背德的な雰囲気を感じてしまい、ぎこちない返事してしまった。

やはりツバキは、小学生と呼ぶには色々と規格外だ。

「……………」

「……………」

そして、背後からは無言の圧力を二つ感じる。散々、言い合いをしておきながら、今は二人の心が通じている。非常に厄介だ。

「……ツバキ、俺は今、振り返る勇気がない」

「えっ？」

「だから、このまま一緒に初詣でも行かないか？」

「それって、お兄さんは私と一緒に出かけたいという意味ですか……？」

この場を離れたという一心から出た言葉だったが、ツバキは更に頬を赤らめ、しかし満更でもないといった表情で、はにかむような上目遣いを俺に向けてくる。

可愛い……。

じゃない。これはヤバイ。

ツバキから向けられる視線の熱が上がるほど、背後から突き刺さる二つの視線は氷点下に近づいていく。

「……兄さん、いつまでツバキを抱きとめているんですか？ 私、ほんの少しですが、兄さんを殺して後追い自殺したい衝動に駆られていますよ？」

「……アサト、そろそろツバキを離してやったらどうだ？ それとも、もう離したくないほどツバキに夢中という事だろうか？ 妬けてしまうな？」

背後から聞こえる二つの声は、とても穏やかな口調だ。



なのに、俺は悪寒で鳥肌が立っているのはなぜだろう？ 玄関が寒いからだろうか？

そうだ。そうに違いない。そう決めた。

「ふふふふ……」

「はははは……」

怖!?

なんだ、このホラー体験……。

俺の背後で、妹と幼馴染おさななじみは今、どんな顔をしているのか……やはり俺には、振り向いて確かめる勇気はなかった。

Mission complete

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』五戦目をお届け致します。

今年の正月イラストがツバキだったので、彼女をメインに考えてみました。結果、ツバキがきっかけになり、周囲の状況が変化していく話になりました。

ツバキはブログの方でヤミヒメから気に入られていて、『ソイヤミ』ではカナコから可愛がられています。そして、三人ともアサトに対して特別な感情があるので、まあ、ラブコメだったらこういう展開だろうと。

今回、これまでにないくらいベタなラブコメを書いて満足です。

ツバキはどんどん美味しいポジションになっていく。

ベアトリーチェとタオエンは、名前だけで申し訳ない。

あと、アサトがどんどん駄目になっていく……今更か。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

前回から参戦したカナコですが、作者的には馴染んでいる気がしますが、どうでしょう？  
今後は、もっとヤミヒメや、他のヒロイン達との関係性にもスポットを当てていきたいです。

次はバレンタイン。予定では、まだ制服姿がないあの娘です。  
和服もいけど制服もね！

2017 / 1 / 10 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る